

世界中で自然保護のために汗と知恵を絞っている人びとに心からエールを送ります！

2/21 (Fri)

「関さんの森」の奇跡 出版記念トークイベント

環境教育の源であり憩いの場である生態系・生物多様性の宝庫を
守る市民の闘いの記録。「まちづくり」の意味を深く問い直す

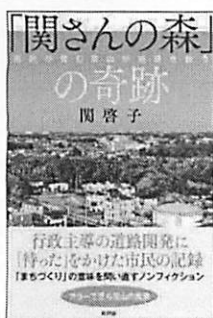
時間: 19:00~20:00

場所: 農文協・農業書センター

東京都千代田区神保町2-15-2 第1富士ビル3階
地下鉄「神保町」駅A6出口より徒歩30秒
☎03-6261-4760

事前予約不要

入場無料



2020年1月下旬発売
本体価格: 2400円
320頁/四六並製
新評論刊

行政主導の道路開発に「待った」をかけた市民の記録

「まちづくり」の意味を問い直すノンフィクション

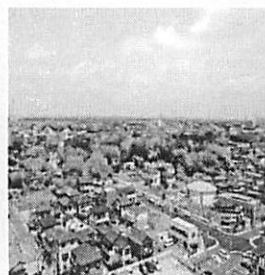
「関さんの森」とは、千葉県松戸市の北にあるおよそ2ヘクタールの森林です。1996年に公益法人に委譲されて以来、市民に開放され、子どもの環境教育の場として、市民の憩いとケアの場として大いに活用されていました。ところが2000年代末、この森を引き裂くようにして都市計画道路が造られ、土地の強制収用手続きがはじまったのです。「関さんの森」では23年前から「関さんの森を育む会」という市民団体が里山保全に努め、誰もが参加できる自然観察会やイベントを開催してきました。環境研究で世界的に高名なレスター・ブラウン博士も訪れ、「この森はとても気持ちがいい」と言って生態系保全の活動を高く評価してくれました。会員たちと元地権者は、里山をでき

るだけ壊さないように道路の形を変更する案を提示しましたが、行政主導の開発に立ち向かってもしょせん勝ち目はありません。でも、黙って引き下がることができなかった。なぜなら、この森は、都市部にありながら生物多様性が豊かで、地元住民が自ら育て、活用し、運営している市民の共有財産だからです。つまり対立は公共性をめぐる闘いであり、単なる抵抗運動ではなく政策提言運動であり、自然との共存を目指す文化運動でもある——そう、これは市民による「まちづくり」をめぐる闘争なのです。本書はこの運動の推移、市民が提言した道路変更案が実現されていく過程を描いたものです。あわせて現代における里山保全活動の価値や意義も論じます。



登壇・著者紹介

関 啓子 一橋大学名誉教授
博士(社会学)。専門は教育思想史、比較教育学、環境教育。動植物(生きもの)の魅力と自然保護に献身する人びとの息遣いを伝えるべくノンフィクション作家の修業を積んだ。趣味はアムールトラに会いに行くこと。



「関さんの森」全景



梅林等の中を通る新しい道路